りびんぐらいぶず　平成二十（二00八）年六月号

阿弥陀さまの方からいつもよびかけて下さっている

ご讃題

若不生者のちかひゆゑ　信楽まことにときいたり
一念慶喜するひとは　往生まことにさだまりぬ
（讃阿弥陀仏偈和讃　第二十六首）

「親鸞さまの魅力を現代（いま）に！～阿弥陀さまの温もりに出遇（であ）えたよろこびを確かめ合い、わかちあいましょう」をテーマに、三年に一度開催される全国布教使大会が去る平成二十年六月十七日･十八日ご本山で開かれました。

開会式に臨席されたご門主はお言葉で

「**他力のみ教えは、往生成仏には自力は役立たない、というだけでは現代人の心に響かないのではないか。**

方向性の問題として、阿弥陀さまの方からいつも南無阿弥陀仏となってよびかけてくださっている、はたらきかけてくださっているという方がわかりやすく伝えられるのでは」との日頃の所感をお述べになりました（本願寺新報平成二十年七月一日）。

実は、それより先、平成二十年四月に浄土真宗の教章が発布されました。その教義欄には「阿弥陀如来の本願力によって信心を恵まれ、念仏申す人生を歩み」とあり、信心を恵まれるのが南無阿弥陀仏とお称え申すよりも先に位置づけられるいわゆる信前行後の伝統的な教学をお述べになったものとばかり受け止められました。

そうだとしますと、大変恐れ多いことではありますが、教章のお言葉だけを拝見したのでは、「阿弥陀如来の本願力によって信心を恵まれる」には、一体どのようにすればよいのか、というのが実ははっきりしていない一面があったのです。

端的に申しあげて、信心をめぐまれるに際して、称名念仏がどのように関わっているかが明らかでない面があったからであります。

ところが、この度は、ご門主直々のお言葉として「阿弥陀如来様の方からいつも南無阿弥陀仏となってよびかけてくださっている、はたらきかけてくださっている」と具体的にお示しいただいたのであります。何とありがたいことでありましょうや。

思えば、「南無阿弥陀仏」は、阿弥陀如来さまの御本願かなって仕上がって戴いた阿弥陀如来様のお名号であります。

お名号は書いて字の通り、夕方の口と書き、号泣の号と書きます。夕方ですから、人の姿もみえなくなったたそがれ時に、あなたどなたですか（たそがれは、誰ぞ彼はが転じたもの）とたずねなければなりません。

それゆえ、お名号は、あなたどなたですかと訊ねなければならないそのときに、「お前の親はここに居るぞ」と大声でよびずめに呼んで居ってくださる阿弥陀如来様直々の御働きのお姿をさすのであります。

声になって呼びかけていて下さるそのお声をお聞かせにあずかるには、阿弥陀如来のお喚び声を聞きとめるには、なによりもまず、声に出だすという行為がなくては聞きとめることができない道理であります。

このお喚び声を聞きとめる行為を聞名と申します。

名もなき民衆の私達をお救い遊ばそうというのが阿弥陀如来様の御本願であってみれば、聞名という行為は、哲学者の宗教的直感でもなく、はたまた、精神集中の修行者が声なき声を聞くというような難しいことをおっしゃったのではありますまい。

ですので、聞名に際しては、まず何はともあれ、南無阿弥陀仏と声に出だすという行為（これを、称名念仏と申します）が位置づけられることになるのであります。

称名念仏が如来様のお喚び声をお聞かせに与かる聞名の前提となるのだと受止めることができるのであります。

浄土真宗のみ教えは、「勅命の他に領解なし」と言われます。これは、阿弥陀如来様のお喚び声をお聞かせに与かるより他に浄土真宗の信心はないのだという意味であります。

そうするとどういうことになるのかと申しますと、おさんどんに忙しい一家の主婦にとって、おさんどんのそのさなかに「なんまんだぶ」とお称え申しましょうや、日常の仕事に忙しい職業人にとって、忙しい仕事のさなかにふと「なんまんだぶ」とわが声でお称え申しましょうやとなるのであります。

そのとき、どんなに耳の不自由な方であったとしても、わが声ながら「なんまんだぶ」と響いてくださるはずであります。

わが声ながら聞こえて下さった南無阿弥陀仏こそは、実は、わが声ながらわが声ではない。阿弥陀如来様が直々に呼びかけたもうお喚び声であったと承ることができるのであります。

もっとも、当の最初から、そのように受止められるとは限りません。なぜなら、ほんとかな、そうかしらといぶかる私、一向にピンとこない私がそこにいるからであります。

これを如来様のお喚び声に対して、疑いの蓋を差し挟んでいると申すのであります。蓋付き湯飲みの蓋をしている間は、折角の如来様のお喚び声も私という器（私という機は器に通じます）に入ってはいただけません。

ところがそういう私にもついに疑いの蓋を取り去るそのときがやってくるのであります（REF「**信楽まことにときいたり**」）。

蓋付き湯飲みの蓋を取り去った途端に、如来様のまことのお心が、命の水が私という器に飛び込んでくださいます。

如来様の信心に恵まれるその瞬間であります。

こうして、如来様の法水がわが器に宿ってくださったからには、昨日まで損じゃ、得じゃ、権利じゃというて参ったこの私が、いつのまにやら如来様のお育てにあうのであります。

阿弥陀如来様の方から、南無阿弥陀仏となって呼びかけていて下さる、はたらきかけて下さるというのは実はそういうことを示していらっしゃるのだと受止めることができることでありました。合掌

◆【サンパウロからのお便り】

プレジデンテ･プルデンテの本願寺で六月八日親鸞聖人七五0回大遠忌法要が「日本移民渡伯百周年記念開拓先亡者追悼法要」と併せて営まれました。正信偈のお勤めに続き、「みかん箱にご本尊を安置する」などご苦労された先人たちの生き様について松峯総長からお話があり、日曜学校生が仏教讃歌「しんらんさま」を合唱し、アニメ「親鸞さま」が上映されました。　堅田開教使は「熱心な門信徒のおかげで大遠忌法要を盛大に営むことができた。苦労して伝えられたみ教えを伝えるために精一杯のことをしていきたい」と話したと本願寺新報七月一日号で報じられました。合掌

◆第十一回滋賀組連続研修会　正覚寺にて　七月十二日十三時より
◆正覚寺前住三回忌法要　正覚寺にて　七月十三日十一時より
◆正覚寺仏教壮年会例会　毎月第一日曜午後七時より
◆正覚寺仏教婦人会例会　毎月十六日午後七時より

著作編集兼発行元　りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派　正覚寺内)
〒520-0501 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax077-596-0166　住職　堅田 玄宥
http://syohgakuji.web.fc2.com/ E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp